

いのちとつながる
自然とつながる

0・1・2歳の食育

第3回

「野あそび」から 広がる食育

「食べものへの親和性」は
あそびで育つことが出来る

食べものに対して、「気持ち悪い
からいやだ」などと言う子どもがい
ます。これは、生き物に対する親し
みの気持ち、難しく言うなら「生き

物への親和性」が低いことから起き
ているのではないのでしょうか。

食べものは生命です。大人よりず
っと自然に近い生き物である子ども
が、ほかの生命に対して「気持ち悪
い」なんて言うのは、保育者として

生き物への親和性

↓
大人が「しかけ」を作ってあげる

↓
食べものへの興味



写真は、ビニール袋の服に両面テープで葉っぱやどんぐりとめつけたもの、「ファッションショー」と呼んでいます。同じ手法で、秋の茶色くなった葉っぱをつければ「森のお化け」に。

お話／鈴木八朗

(神奈川県横浜市・くらぎ永田保育園園長)
1964年横浜生まれ。DVや虐待を専門に母子生活支援施設を運営したあと、くらぎ永田保育園の新設にかかわり現在に至る。ブログ「八朗園長の遊びをせんとや生まれけむ。で保育園の実践や子どもの文化を発信し続けている。



は悲しいですね。

でも大丈夫。自然といっぱいあそぶことで、食育のベースというべき生き物への関心はどんどん育ちます。今日はその中から、「植物に触れる」「植物であそぶ」ことで食べものへの興味関心が高まっていくアイデアをまとめてみました。

例えばさつまいもの葉。裏返してみると葉脈が赤く浮き出していて、人間の血管そっくりです。

これによって土の中の栄養を吸い上げていくという理屈はわからなくても、葉脈という「生きるためのデザイン」を見せることで、2歳の小さな子どもでも「さつまいもは生きているんだ。自分たちと同じなんだ」とリアルに実感することが出来ます。

大人は紅葉を見て「ああ、きれいな」と感動しますが、子どもは手に取れるもののディテールのほうにひきつけられます。手に取っておもしろさに気づくためには、大人が環境を整えてあげるのがいいですね。

栽培活動をやっていないなくても、園庭や公園の植物の葉っぱで充分。葉っぱに興味をもち、こすり出しなどで楽しくあそんだあと、「これ、園のごはんで食べる野菜やほうれん草と同じだよ」と伝えれば、食べものへの興味がどんどんわいてくるでしょう。

